

「そもそも大昔は
どうだったんだっけ？」

(人類のターニングポイントをチェックしてみる)

うときゅう いっき

目次

- といえば子供の頃の夏って
- 古代人モドキの生活をしたら人類史を遡ってみたいくなった
- 1 万年前の出来事への興味
- 1 万年前の人々への興味
- 全ては火を味方につけた事から始まった
- 人類の転換点への興味
- 2 つの置き換え
- 諸元はマーケティング？
- 諸元は電気？
- ところで、進化ってなに？
- 後記
- 著者プロフィール

2022/8/10

そういえば子供の頃の夏って



エアコンが壊れて扇風機だけの生活も早2か月。
直すなり買い替えればいいだけの話なのですが、
諸般の事情でその代金が現在、手元不如意の今夏。

「なあ6月。お前そんな奴じゃなかったよな」
という想定外の酷暑の6月が過ぎ
思ったより涼しかった7月で一息つき、
再びぶり返し、却って暑さが倍増したかの様に
感じられる昨今の8月。

締めて2か月の猛暑耐久訓練生活。

そんなある夕間暮れ、不図

「そういえば子供の頃ってエアコンなかったよな」
と変な事に思い当たりました。

「扇風機も一家に1台だけ」

どうやって暮らしていたのか自分の過去に興味が湧きました。

「それを家族6人で使っていた。みんな揃えば風が回ってくるのは6分の1」
よくまあそんなもので耐えられたものだ和我ながら少し驚きました。

「どうやって暮らしていたんだっけ？」

それで記憶の糸をたどってみると、その扇風機すら滅多に使っていなかった記憶も蘇ってきました。

うちわ、風鈴、打ち水、氷室の氷に手を当てる、裏庭の井戸で汲み上げた水で顔を洗うなど、結構涙ぐましい努力を小まめにしていた事を思い出しました。

（因みに「氷室」と書いたのは、当時我が家に電気冷蔵庫ではなく、氷屋さんから買った板氷を上に入れ、そこから降りてくる冷気で庫内を冷やす「非電気冷蔵庫」の事をそう表しました）

只、夏の気温は今ほど高くはなかった様に思います。上がってせいぜい 30 度ちょっと超えるくらい。

それで何とか凌げていたのだと推測いたします。

「そういえば一体いつの頃からエアコンがないと暮らせなくなったのだろうか？」

考えてみれば自分がエアコンのある生活を初めてしたのは結婚してアパート住まいを始めてからでした。西暦で言うと 1983 年頃から。

勿論就職した 1978 年、会社の事務室はエアコンが利いていましたが、オヤジの代は事務所（工場勤務でした）と謂えどもエアコンはなく、窓を可能な限り大きく開け放ち、団扇と手拭い片手に書類を書いておった様です。

手拭いは顔の汗を拭う他に、半そで開襟シャツで剥き出しの腕から滴る汗のせいで書類がしょっちゅう腕の下側半分にはばり付くのを防ぐ為でもあった様です。

人によっては夏なのにインク汚れを防ぐ黒い袖覆いをしていた人もいたようです。

昔の映画で小役人の代名詞みたいに使われていたあの黒い布封袋です。

扇風機は風で書類が飛ぶといけないので天井扇風機が緩い回転速度で申し訳程度に回っている位だった様でもあります。

そして思ったのは

「要はこの苦痛と面倒臭さから逃れエアコンガンガンで「快（冷氣）」と「手間いらず（人は動かず何も言わなくても機械が勝手に快適を提供してくれる全自動）」を手に入れたのと引き換えに却って気温が上昇してしまったという事か。なんか皮肉な話だな」

そんな事もあって今回色々考えてみました。

「そもそも大昔はどうだったんだっけ？」

2022/7/24

古代人モドキの生活をしたら人類史を遡ってみたいく なった



どうせ貧乏ついでにそれを「楽しん」だり「面白がっ」たりしようと「古代人モドキの生活」をトライしてみようと思い立ちました。

別に古代の生活だからと言って「赤米」を焚いて食べたり猟に出かけたりする訳ではありません。

しかし幾ら何でも古代人生活は少し無理がありそうなので鼻から日和って「せめて」もの「産業革命以前」位に設定し直しました。

まず移動は徒歩かせいぜい自転車。

当然エアコンはなしですが、但し、当時の夏の気温は現在より数度低かったらしいので扇風機だけは相殺勘定扱いで認める。

電気もなかったでしょうから家電製品は一切使わずに、と言いたい処ですがそれはいかにも負荷が過るので、せいぜいライティングとしての電気は極力使わない、即ち夜の活動は殆ど行わない等をやってみようと思い立ちました。

「幸いにも」と申しますか、今迄のトラブル案件がオセロ土壇場最終手、白黒逆転総裏返しで「禍転じて福と為す」が如く

アナフィラキシーショックの恐れ是在りでワクチン接種できない事から人混みを避ける為

に公共交通機関を殆ど使っていないのですが、それを活かして移動は徒歩かせいぜい自転車のママでいる、とか

エアコンが壊れても、今は亡きオヤジが設えたエアコンは特殊仕様で代替品がない（壁面上下中央位置の埋め込みタイプは既に製造中止で壁掛けタイプは何故か家の作り上設置スペースが何処にもない）事からエアコンなしの生活をもう3週間以上強いられているのですが、其れもそのままにしておく。

又エアコンが壊れた影響で家の窓や扉を殆ど全開にしておりますが、副作用として夜灯につられた虫に「ついで刺し（ついでに刺していく）」ばかりされているので極力消灯しており結構不便なのですが、これもこのままにしておく。

等です。

以上の様な状況設定をしてから早いもので現時点、既に約1週間が経ちました。

処が、そこで気づいた事は「文明の利器」に関する事が主でした。

「基本仕様だけでも当時からすれば相当なものだ。それ以外ははっきり言ってオマケ」で、そこからさらに進んで

「車の付加仕様、家電製品のこれでもかこれでもかの便利機能、お散歩やジョギング、ツーリング時の雄鶏コケコッコウェアなどなどは本当に必要なのだろうか？過剰 lapping 同様資源と手間の無駄遣いでしかないのではなかろうか？」

そして更にまた進んで

「この「売らんが為」の隠れ蓑として「過当競争過剰生産」に「需要創造」という名の美称を与え、結果「異常な迄の無駄と変形」を野放図に放し飼い。

であるならそのでっぱりと変形部分を抑制及び原型戻しするだけでも相当な資源抑制とCO2削減や心理的整流化に役立つのではないだろうか？」

産業革命以前に戻った事を「想定しただけ」ですらこの様な疑問が湧いてきた訳です。

ならば、これを古代人の視点迄遡ってみると次は何が見えてくるのか？

かなり興味が湧いてきました。

1 万年前の出来事への興味



「(人類の) 脳の進化は1万年前から止まっている」

何処で見たのか、見たこの記憶が正しいのかどうかさえ分からないのですが、見た当時

「何それ？そんなことある訳ないじゃないのよ」

と思った記憶が鮮明なので間違いなくどこかで目にした文言だと思います。

その当時

「1万年前に止まっているのだったら、活版印刷のグーテンベルグはどうなるのよ？コペ
転のガリレオや蒸気機関のワットは？飛行機のライト兄弟や相対性原理のアインシュタ
インや近いところではコンピューターを発明した人やスマホのスティーブジョブズさんなん
かはどうなるのよ。そんなことある訳ないじゃないのよ。阿保クサ」

そう思ったからです。

しかしこの文言は何故か頭の片隅に残りました。

「仮にそうだとしたらどうなるのだ？」

「何を以てこの文言の主は進化と言っているのだ？」

「今天才と言われている人たちやこれ迄に時代を画する様な発明をしたと言われている、
或いは自分たちがそうだと信じて疑わなかった人たちは実は採るに足らない小物達に過ぎ
なかったという事？」

もし仮にそうだとしたらこの事実は自分にとっての目から鱗、天地逆転のコペ転以外の何
物でもなく「常識大転覆の大変事」に思え、一種の恐怖感さえ覚えました。

「それにしても何に着眼するとそう見えてくるのだろうか？」

「脳の何処？脳のどの働き？或いは脳が促す行為の何か？何だろう？」

最後の疑問はそれでした。

1 万年前と言え、今自分が興味を抱いている古代人よりもっと前のむしろ原始人に近い年代です。或いはその端境期かもしれません。いずれにせよかなり前まで遡る事になります。産業革命以前の生活体感実験をしておりますが、それどころの話ではありません。

「人類が上昇気流の乗る前に既に人類の脳の進化は終わっていた」

是はかなりショッキングな仮説です。

「だったら今の是（この時代のこの状況、状態）は、今のわれわれは一体何なのよ!？」

とため息が漏れてしまいそうです。

「ジョブズさんですら小物だとすると、自分等一介の凡人、市井人は一体全体何になってしまうのか？砂漠の砂の一片（ひとかけ）、芥子粒、蚤の目ん玉サイズ以下の存在でしかないじゃないのよ」

この恐怖心と納得のいかなさ（＝不領）の入り混じった心象に対して「で、それはどう見るとそう見えるのか？」という好奇心と整理のつかない落ち着かなさの入り混じった感情の方が勝った様でした。

この文言の主が誰で、その人の著作物が何なのかを何よりもまず探し出そうとはあまり思いませんでした。

其れよりも1万年前と言った根拠（視点視座）とその新しい視点が齎す「今後への変化」の方に俄然興味が湧いて参りました。

「この人の論に乗る前にまずは自分なりに整理してみよう。その方が断然面白そうだ」

そういう思いのせいか直ぐには「言い出しっぺ探し」に飛びつかなかった様です。

2022/7/25

1 万年前の人々への興味



初めに。

「本文は日本語なのに何で英文の題名をつけるのですか？」

というご質問を戴きましたので冒頭ながらこの場をお借りして少々ご説明を。

「外国の人にも読んで欲しいから」

がその理由です。全文英文/日本語文コンパチにすればいいのですが、面倒なのと力量不足で英文仕様に出来ない乍、目に留まり易い様にせめてタイトルだけでも英文にしよう（英文を入れておこう）と思ったからです。

さてここからが本題。

まず1万年前の人々はそれ迄にどんな発明の恩恵を受け、どんな事までできる様になっていたのか？が最初に明らかにしておきたい事だと思います。

思うに現代人は今迄の発明の恩恵を受けそれを享受して人類全体としては底上げされている一方、発明元である原始人、古代人はその恩恵を受ける事はなかったものの何もない中で発明をしてきた訳ですから恐らく現代人よりその先端は遥かに優れていたと想像されます。

PC にしろ、車にしろ、テレビにしろ、これらは全て道具ですが、現代人はその道具を使っていろいろなことを成し遂げている一方、原始人や古代人は道具のない時代に道具そのものを発明してきた訳ですから、その観察力、発想力、整理力、応用力等様々な面で現代人とは比べ物にならないくらい潜在的なパワーが上だったのではないのでしょうか。

実は自分が原始人や古代人に着目した元々のきっかけは「人類史上最後尾で最も優れている筈の現代人に余りの情けなさ」を感じ、その裏返しで大元はどうだったのか？に興味を持ったからです。

「情けなさ」というのは、現代人の目を覆うばかりのパワーの劣化もさる事ながら、その埋め合わせでもするかの様なメディアによる「カリスマ、達人、天才」の大安売りに対する完全な嫌悪感と、一応世間一般からのお墨付きがありはするものの其れとてよくよく観察してみれば、原始や古代の名も知れぬ大粒の天才達の目的は「仲間の為」だったのに対し、現代の天才群は「まずは我が名。そしてお金」の輩でしかなさそうな「その小粒さ」に対する「残念至極感」の事です。

余談が過ぎました。話を元に戻しましょう。

此処から想像上の1万年前です。

発掘資料から石の鏃（やじり）、石斧、石包丁はあった様です。要するに今あるものを用途（達成したい目的）に合わせて加工するという発明。

その具体化が自分の手足以外の能力の獲得である「道具」の発明。

又、植物等から超出した絵具という道具を用いて描かれた壁画も発見されておりますから抽象化という発明もされていた様です。抽象化と言えば建造物の遺跡も見つかっている事から数学、天文学、時間概念等の高度な抽象概念の原型も生まれていたのかもしれない。

当然ながら言語はあったでしょうが、それを記録する文字があったかどうか？文字は絵画の後の産物だと思われますから。

でもまだ肝心なものが何か欠けている様な。

さて？

全ては火を味方につけた事から始まった



現代の富の元である生産（又は生産財）と貨幣（信用概念又は信用取引）はもうあったのでしょうか？

生産は中学の教科書によれば我が国では弥生時代に大陸から「稲作」が伝来し、農耕生活（＝定住化と狩猟と違って偶然によらない計画的生産と蓄積）が始まった様なので、生産はまだであった様な気がします。弥生時代は可成り後期なので。

又貨幣についてはそれ迄の物々交換が成り立ちにくい、例えば遠方との取引の開始等の条件がないと代替取引（信用概念、信用取引）の発想が生まれないでしょうから乗馬や船等の長距離移動手段の獲得前にはなかったと思われます。

1万年前に関する資料には乗馬や船の痕跡は載っていない様です。

となれば他に何が？

で、前回の自分の記事で添付のイラストに使っておきながらすっかり見落としていたものがありました。

「火」です。

何故見落としていたかと申しますと火は人工物（道具）ではないという思い込みがあったからです。なので、無意識に除外してしまった。

しかし、よくよく考えてみれば「本来最も生き物が恐れる火というものを道具として味方に引き入れる」というのは、是はもう立派な発明です。

まず、夜に火を焚いておけば火を恐れる獣に襲われる事は滅多になくなります。又火を使って炙り焼きにするなり焚火にくべて蒸し焼きにするなりする事を覚えれば味もよくなり日持ちもよくなり衛生にもいい事が分かって生活レベルと範囲が大幅に伸びたのではないのでしょうか。

権力の元となる武器や生産の飛躍的向上の元となる農具も鉄の精製を可能にした「火を味方につける」という発明がなければ全く実現しなかったでしょう。

因みに肥料のない時代の焼き畑農業も重すぎる石貨に代わる金属貨も生まれていなかったでしょう。

恐らく火は人類の生活や価値観に激変を齎したのではないのでしょうか。

security（安全、防御）、農業（食料、生産）、武器（軍事、権力）、貨幣（信用という、富）、快適（暖、調理、衛生）これらは火がなければ普及、発展し得なかったものです。そして火を energy（熱、熱源、熱量）として勘定すれば現在の温暖化の大元として既に一万年前から仕込まれていた訳です。

そして又国民レベルで現在最も重用されるのが最後の「快適」

処がその「過度の快適追及」が図らずも energy の増大の大きな要因となっている。

霊長類の一部は木の葉を噛んでスポンジとして使う様です。気の葉のスポンジは道具です。しかし人類以外の生物で火を道具として使う生き物は皆無です。そこが人類と他の生物を根本的に分けた分岐点。

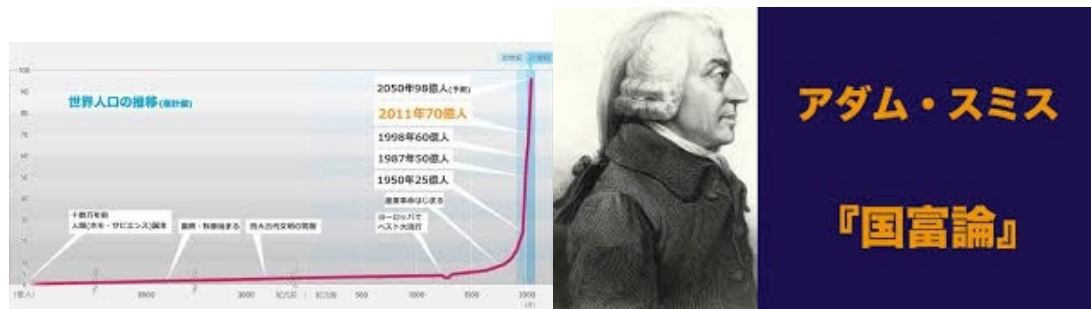
恐怖を他の生物同様には終わらせず「これを使えないか？」という逆転の発想をし得たのが人目人科だけだった。

しかし火の活用は後代（現代）において地球からお叱りを受ける最大原因にもなってしまった。

先述の相反問題は相当に根深いものである事が分かって参りました。

2022/7/26

人類の転換点への興味



前記事では1万年前の「火を味方につけた人類」のお話致しましたがその火にはどうやら功もあるが罪もありそうだという事も暗示いたしました。

他の肉食哺乳類に比べ体も小さく狩りに使う牙爪も持ち合わせていない人類の祖先がここ迄繁栄するに至ったのは「火を味方につけた」事が大きかったのではないのでしょうか。

是を火の「功」だとすると「罪」の部分は今日の地球温暖化の元を組み込んで(built in)しまった事かもしれません。

というより「ある時点ある規模の処迄は功への力を発揮し人類に寄与していた火が、ある臨界点を越えた時点で罪に変質してしまった」とは言えないのでしょうか？

それが何処の時点であったかは暫く置くとして仮に原始人なり古代人が今の現代社会に暮らす我々のニーズ（物言い、言い分）を聴いたらどんな反応を示すでしょうか？

「エアコンの吸入口には雑菌が付き易いから掃除をする際雑菌を駆除しお肌にも優しい植物由来 100%の専用洗剤が必要よ」

是は以前自分の記事で書かせて戴いた「筆者も驚いたニーズ」なのですが、是を原始人なり古代人が耳にしたらどんな反応を示しますでしょうか？

まず

「何の話？」

が第一に思いついた反応

第二には

（言っていることを説明できたとして）

「涼しくなる（暖かくなる）だけで驚天動地の驚き。それで十分。それ以上未だ何か要るなんて？？？やで」

そして最後の想像は

「丘の向うの集落には何やよう分からん部族が暮らしてはるゾ」

この話は別に原始人や古代人でなくても例えば産業革命直前の英国人でも同様な感想を持つのではないのでしょうか？

そして思い出したのが世界人口推移図。

是によれば産業革命以降、特に 20 世紀に入って以降、世界の人口が爆増した事が一目瞭然の推移図です。

原始以来地を這う様に推移していた人口推移グラフの線が産業革命以降、縦軸を壁面に見立てたとしてその壁に突き当たった蛇が壁面伝いにググッと垂直に伸び上っているのです。

そして農業中心の社会から工業社会が生まれ且つ主役はそちらにシフトしました。

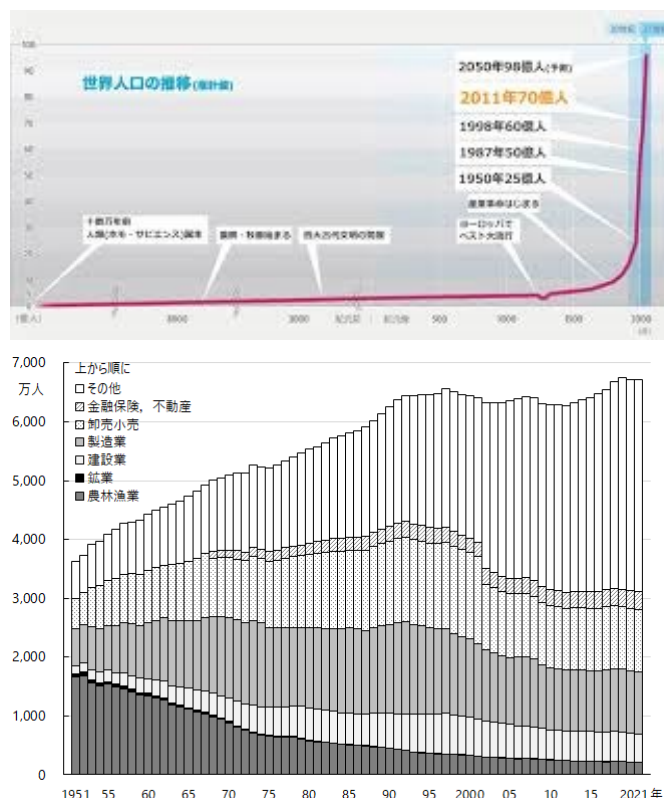
この工業化された社会が生み出す大量生産と交通網の延伸拡大等により社会や市場は多様化、複雑化し、その動態を捉える為にマーケティング理論が樹立される様になりました。図らずもこのマーケティング理論樹立（結果として市場の細分化とレッテル張りが横行、全人格的人間を属性分けして用途毎にパーツ化した）により戦争の intelligent 化と大規模化が進行し、更にはちょっとした差別化や殆どこじつけに近い様な言いくるめによる需要創造ならぬ「不要品押込」が専行しその後には余剰物がほったらかされ其れに関して誰も責任を取らない「無責任社会」が現出した様な。

そしてこの「無責任でも OK。自動修正役がバックにいるから」というお墨付きを与えてしまったのが Adam Smith「国富論」中最後部、実証法上の超飛躍。

「神の見えざる手」

であった様な気がします。

2つの置き換え



今迄のお話で人類が「火を味方につけた」事と直前のお話では「産業革命を機に世界人口が爆増した図表」を示しましたが、現代人である読者の方々には今一つピンとこない懸念がございましたので、今回読者の方々の実感に合うよう、上記の二つを別の言葉に置換しようと思います。

まず「火」を、火力発電イメージを用いて「電気」に。

次に産業革命以前の線を自然増に合わせて緩やかに伸ばし、それが現代最後年年表の縦軸として採られた壁にぶつかるその交点より上の「でっぱり部分」を「過剰人口」ではなく「過剰生産後の不使用余剰物（余剰生産財）又は不必要押し付けられ、言いくるめられ購買物（不必要消費財）」に置換してみました。

（特に後者はとすると「余剰人口の出っ張り部分を減らせ」という物騒極まりない発案発想の萌芽をまずは抑える必要を痛切に感じておりますので、兎にも角にも初っ端から手を打たせて戴いた次第）

この二つを念頭に今一度我々人類の「生産の歴史」を振り返ってみましょう。

まず火を味方につけた事で「煮る、焚く、蒸す」つまり作物の加工調理が可能になり、人々にその食材を安定的に供給する農業が生まれました。

我々が小学校で教わった言い方を当て嵌めると「第1次産業」と言い換えられます。そして前回お話申し上げた産業革命の成果が行き渉る様になると次に工業というものが現出して参りました。

これ又小学校で教わった言い方を当てがいますと「第2次産業」と言い換えられます。特にこの「工業化社会」では、初めのエネルギーは蒸気（機関）でしたがいずれそれはエジソンの発明によって電気に置き換わり、その電気が工業化社会を飛躍的に拡大進歩させました。

その功績は多々あるものの、一例として「灯」によって「夜の時間の活用とその需要」が新たに生まれた事だけとってもその威力が想像出来ますでしょう。

次に小学校で教わるのが「第3次産業」

言い換えればサービス業です。

サービス業とは農業、水産業、林業、工業の生産物（products）に人（人的ノウハウ、スキル、パワー）を介して（付帯させて）提供する産業です。

現代社会ではこの第3次産業への従事者の構成比が一番多くなっております。つまりそれで「飯を食っている」人が多い訳です。

そして昨今言われ始めているのが「第4次産業」の現出。

此処で言う第4次産業とは「情報化、情報活用、情報処理などの情報業」を指します。

実際には情報産業より前に「情報化社会」の方が早かに到来している感があります。

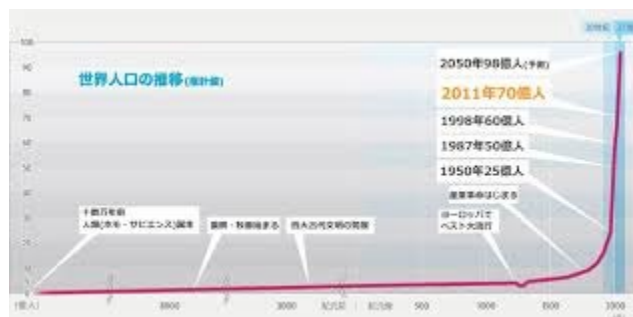
同じ様に「社会」という謂い方を用いますと第1次産業社会は「農業社会」とは言いません。普通「農耕社会」といいます。

同様に第3次産業社会を「サービス社会」とも言いません。

「社会」という言葉がついて認知されているのは「工業化社会」と「情報化社会」だけです。

何か理由があるのでしょうか？

諸元はマーケティング?



「社会」という言葉がついて認知されているのは「工業化社会」と「情報化社会」だけです。

何か理由があるのでしょうか？

という前回のお話の続きです。

推論ですが「～化社会」には「工業」が、「情報」が、「全ての社会活動の根底に横たわる」というニュアンスがあるのではないのでしょうか。

因みにそれ迄の農林水産業は工業化され工業傘下の枠組みの中にも組み入れられました。

又、その工業すらもマーケティング上の情報化の中に組み入れられると同時に人々の私生活、内面生活をも把握管理誘導が可能になりつつあります。

これは今迄にない程の、つまり前例がないのでなかなか読み解けない変化かもしれません。

話を少し振ります。

前の記事で第3次産業であるサービス業の定義として以下の様に述べました。

サービス業とは農業、水産業、林業、工業の生産物（products）に人（人的ノウハウ、スキル、パワー）を介して（付帯させて）提供する産業です。

現代社会ではこの第3次産業への従事者の構成比が一番多くなっております。つまりそれで「飯を食っている」人が多い訳です。

で、此処で不図思い当たった事がありました。

それは

第3次産業が人を雇う人海戦術方向なのに対して、今回取り沙汰されている第4次産業或いは情報化社会というのは、第3次産業で活躍の場を得た「人間」を効率化省力化の名のもとに「減員化」「無人化」する方向に働いているという事です。

前記事の語法を用いるなら「でっぱり部分」をカットする方向に働いているという事です。

「でっぱり」という謂い方は雇用される側から見た言い方ではなく、あくまでも経営効率、利益獲得効率（資本回転効率）を重用する側からの物言いです。

この動きは第3次産業だけでなく、ご本家の第2次産業にも及びつつあります。

言い方を変えると既に第2次、第3次産業は第4次産業、情報化社会のコントロール下にあるともいえそうです。

そしてその主導的役割を果たしているのが実は GAFAM 等の IT 産業界ではなくそれを産んだ大元の「マーケティング的思考法」なのではなかろうかと自分は感じております。

GAFAM が得意としそうな効果的広告、広告効率や Big Data の活用は、元はマーケティングのそもそもの目的、即ち「最大商機獲得」の一手法に過ぎないと思われるからです。

誤解があるといけませんので、仮にマーケティングそのものはお金同様、それ自体は「中立的なもの（存在）」だとしましょう。

となれば後はその「運用」の問題です。

「運用する側」即ち人間の側（最深底部に横たわる真の目的とその解釈の仕方）の問題です。

2022/7/26-4

諸元は電気？



ここで少し妙な質問をします。

我が国での話ですが

「大卒をインテリと言います。インテリという謂い方には嫌な響きが込められております。何故でしょう？」

恐らく

「大卒インテリがその intelligence を人々の為に供していれば、そのような言い方はされなかったでしょう。大学で折角得た intelligence を公（おおやけ）の為に全く使わず、自らの都合の為に優越的に使うから疎まれるのではないのでしょうか。もし大卒インテリがその intelligence を人々の為に惜しみなく使っていれば良い意味で使われていたかもしれません」

この傾向は我が国のみならず世界中のインテリ層に当て嵌りつつある様です。

そしてこの傾向（公（おおやけ）よりも自己都合最優先傾向）のある方々がこうした傾向を抱えたまま各界の指導的立場に就かれている様な気がします。

これら高位に就かれた公（おおやけ）よりも自己都合最優先傾向のある方々は「売らんが為」なら「後で受益者がどうなろうと知った事ではない」何故なら「後の事は「神の手」（別に宗教上の神を特定するものではありません。要するに責任転嫁先なら何でもいいのでしょう、立派な名前がついていさせれば）が良しなに処理して下さるから」という様な心象でやりたい放題したい放題。

その結果が誰も責任を取らないほったらかしの

「過剰な無駄の残骸の山」

に覆われてしまったのが「現在の地球環境」

仮に人口が今のままでもこの無駄の部分が解消されるだけで排出エネルギー換算での実質人口数は今の 80 億ではなく 50 億位になるのではないのでしょうか。

こうなった元は近代マーケティングで全人的一人の人間を属性や特性、その生活シーン別に個別分解してパーツ化し（人口 x 分解された属性等のパーツ化数）－（実人口数 x 1）＝（その差分）だけ「商機拡大」の名の元に無駄や無理な需要創出（＝実は不要創出）を行ってきた結果（快適の推奨＝過剰快適の垂れ流し）が現在の地球温暖化の大元の様な気がしないでもありません。

因みに火に置き換わった電気の存在がなければ工業化社会も情報化社会も成り立ちません。この両社会の根底を支えているのは実はこの「電気」である様な気がしております。となれば農耕社会の黒子であった「火」が「電気」に置き換わった時が現代社会の誕生と、同時に地球からのお叱りの暗示「大きな曲がり角」だったのかもしれません。

火と電気。

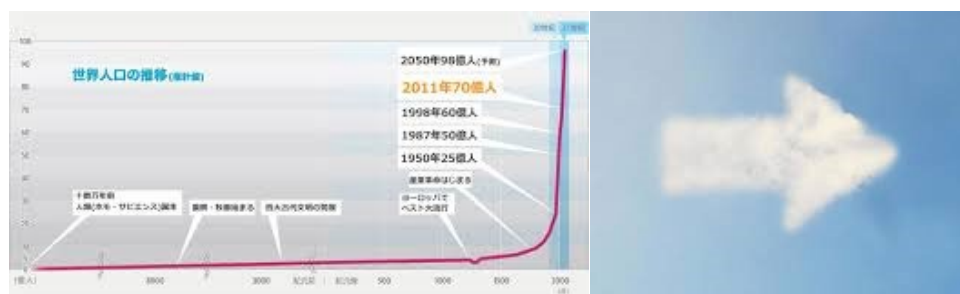
是が人類史上の 2 大発明だとするとエジソンさんだけが古代人の大粒の天才に匹敵する唯一の近代人だった様な気がします。

1 万年前に脳の進化が止まったと言われる人類に第 3 番の画期的発明（よく使われる数、3 大発明の 3 番目）が出来るのでしょうか？

人によってはこの先 1 0 0 万年人類が生存し続けてもこれ以上の脳の進化はあり得ないという方もいらっしゃるようです。

さてこれから我々はどうすればいいのでしょうか？又どうなっていくのでしょうか？

ところで、進化って何？



一通り人類史を概観して参りましたので此处で本題の

「(人類の) 脳は1万年前から進化していない」

に戻りましょう。

記事を書きながらも上記の文言について色々角度を変えて考えてはみたのですがどうも今イチ納得がいく視点が見つかりませんでした。

いや仮に1千年前と言われても百年前と言われても昨今の目間苦しい新技術の登場や新手法の開発ラッシュを目の当たりにするとどうも実感的に納得がいきませんでした。

譬え1年前からと言われても「日進月歩」感からすると違和感を抱いたでしょうから。

そこでアプローチの方法を替えてみました。

曰く

「ところで進化とはなんぞや？」

と。

まず思い浮かぶのは

「以前よりも優れた能力の獲得」

しかし是では今の実感を変えるには足りません。日進月歩に因んで「以前よりも進んだ能力の獲得」と置き換えられますから。

そこで以前記事で書いた定義を充ててみました。

「適者生存。即ち環境の変化に適応するものだけが生き残る」

の内の

「環境の変化への適応 (変形、変異、変身)」

を当こうとすれば

「1万年前に人類が火を味方につけて以来その加護の下、人類は大きな環境変化をもろに受けずに済んできた。

環境が激変しなければ環境変化への適応はいらなくなる。環境変化への適応を進化と呼ぶ

なら、環境そのもの、つまり進化の起因そのものがないのだから進化は起こらない」
是が正しい解釈だとすれば

「人類はこの1万年基本的には安定モードだった」

と言い換える事が出来ましょう。

しかし昨今、以前の記事でもお話ししました様に「不動不変と思われた季節の到来順そのものが変わりつつある様な「大きな曲がり角」に差し掛かっている予感もあります。

是は火の功罪の罪の部分が齎した1万年後の「大きな環境変化（主に地球温暖化）」の名に値するレベルのものであれば、新たな適者生存要件を見出して適応する「又と無い（再）進化のチャンス」に臨んでいるともいえそうです。

もし、仮にそうだとすると我々は適者生存要件を満たす為に今の生活や価値観、生き方も含めて激変せざるを得ない事態をも念頭に置く必要があります。

恐らく今迄の派生や垂流レベルの解では「全く」事足りないでしょう。

そちらの解を求める方が将に「完全なる無駄」

なので、今盛んに喧伝されている「おいしい話」や「お手軽簡単便利で即効お役立ち」的なものはまず何の役にも立たないと思います。

視点、視界、視座を根底から変えなくてはなるまいという意識変革が DX(Digital transformation)の Digital の D が付くか否かに関わらず transformation（変形、変異、変容する程の大変革）が何よりもまず喫緊の課題でありその解決策の叩き台作りが強く求められる所以の様な気がしております。

今迄我々が錯覚していた可能性があるのは「深化（＝同じ処の深掘り）」を「進化」と思い込んでいた。同じ処の深掘りではなく浅くてもいいから次へ進む「進化」

それが今とみに必要な気が致します。

2022/8/10-2

後記



「今年の夏は子供の頃の「あの夏」を堪能致しております」

汗だくになって表を歩き、人目もはばからず首にかけたタオルで顔を拭い、家の塀が作る日影があるとその細長い回廊を伝って歩く夏。

窓を開けていればこそ、セミの声がじかに聞こえ、打ち水で冷やされた土の香が微かにする冷気が入ってくる。

氷を口に含み、水で手のひらを冷やし、風呂場で水浴びをする夏。

それでもだめなら最後の一手で、この世から一時ドロンパッする

昼下がりの

「お昼寝タイム」

そんな夏を堪能致しております。

(著者プロフィール)

うときゅう いっき

本名 宇都宮一貴 (うつのみや かずたか)

一九五三年東京生まれ。早稲田大学第一文学部ロシア文学科を二回留年の後、卒業。大手電機メーカー商品企画部に二十年間勤務。同子会社経理部等に十六年間勤務。四十歳から五十二歳まで十二年間重度うつ病を罹患。左遷、リストラ、降格、離婚、家族崩壊の後、生還。定年退職後、嘱託社員契約を辞して株式会社うとQを設立。趣味は観察すること、考えること、書くこと、カメラの四つのk。著者名は苗字、宇都宮一貴の音読みで、中学校時代の仇名に由来する。

宇宙の「う」

東京都の「と」

宮殿の「きゅう」

数字の「いち」を詰まり音便で「いっ」

貴族の「き」

で、うときゅういっき となります。漢字にするとかなり御大層な名前に見えますので、敢えて音読みひらがな表記にしております。

ホームページ: <http://utokyu.co.jp>

(出版情報)

著 者 うときゅう いっき

発行人 宇都宮一貴

発行所: 株式会社うとQ

〒二一五 - 〇〇一八

神奈川県川崎市麻生区王禅寺東5丁目34番7号

電話: 〇四四 - 九八九 - 一六九八

発 売 株式会社 うとQ

編 輯 ナレッジフォレスト (大竹鉄哉)

カバーデザイン&DTP 製作 ナレッジフォレスト (大竹鉄哉)

©Kazutaka Utsunomiya uploaded in japan 2020

発行日: 二〇二二年七月二十七日 初版発行

本書の一部または全部について、著作権上、著作権者の承認を得ずに、無断で複写、複製することは禁じられています。

(その他著書)

●多数 (全60冊 2022/8/4 現在)

●尚、掲載写真は全て google 画像サイトの著作権フリーのものをダウンロードして使用し

ております。当社には著作権、版權は全くない事を明記させて戴きます。